〔研究ノート〕中村研一《日本海沖ノ島》について

高山　百合

福岡県は青木繁や坂本繁二郎、古賀春江、児島善三郎など近代洋画史に名を残す多くの洋画家を輩出しているが、本稿で取り上げる中村研一もまた、福岡の近代洋画を語る上では欠かすことのできない重要な作家である。彼は幼少期から少年期という多感な時期を、両親と離れて祖父母の郷里である宗像で過ごし、宗像郡宮田村尋常小学校（現・南郷小学校）を経た後、県立中学修猷館で児島善三郎が結成した絵画同好会「パレット会」に参加したことで絵の楽しみに触れ、東京美術学校では岡田三郎助に師事し優秀な成績を修めた。卒業後はフランスへ留学、留学からの帰国後は帝展で受賞を重ね、戦後の日展に至るまで審査員を歴任し、日本芸術院会員に推挙されるという栄に浴した。灰色や茶褐色を主とする色調と、正確なデッサンに基づき、端正で力強い筆致で大画面を造形的に構築する格調高い写実的画風は高い評価を受けていた彼は、その同時代への影響力も並々ならぬものがあっただけではなく、戦時中には藤田嗣治らとともに従軍画家として数多くの「戦争画」を描いたことでも知られている。こうした日本近代美術史における重要性に加え、作家の没後五〇年を目前に控え、彼の画業を再評価することは急務である。また、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」としての世界遺産登録をめぐる活発な動向の中でも、近代の宗像の文化を考えるうえで欠かすことのできない

【図1】中村研一《日本海沖ノ島》昭和11年、50.0×60.6cm、油彩・画布、宗像市蔵

重要な作家として今後さらに評価されてゆくことであろう。そのような動きを背景に、筆者は「近代美術に描かれた宗像」をテーマとして、調査を進めている途上であるが(1)、本稿では、中村研一の《日本海沖ノ島》(昭和十一年、宗像市蔵)【図1】について、作品の制作背景や彼の画業における意義について論じることにしたい。

ここで絵画の主題になっているのは、その画題が示す通り、古来より「神宿る島」として禁忌されてきた玄界灘の孤島、沖ノ島である。全体に沈んだ色合いで構成され、とりわけ黒い絵の具を多用して描かれた島の部分は、ほとんどは石英斑岩からなるという岩の島の肌合いや質感を誇張しているようである。配置や縮尺の変化等、絵画上の多少の再構成はもちろんあるだろうが、波止場にイーゼルを立て、太鼓岩を右手に見ながら、沖ノ島を見上げるような位置で構図をとったと思われる。湾曲する波止場に沿って、視線を左から右に移していくと、沖津宮へと導く石段が右から左上へ、そして右上へと続き、そこに鳥居がある。そしてさらに左上へ向かって視線を移すと、そこに小さく描かれた沖ノ島沖津宮の鳥居が見えてくる。絵画を制作する際、高所から見下ろす俯瞰的視点から描くことの多い中村が、このような仰視的視点をとることはきわめて珍しいが、その「見上げる」という構図にも、悠然と立ち現れる沖ノ島の神聖な姿と、それを畏敬の念をもって見つめる画家の様子を見て取ることができる。全体としてシンプルな構図からなる風景画ではあるものの、この時期の中村の特徴でもある躍動感のある曲線を多用することで、視線を蛇行させながら、順に絵の上部にある沖津宮の鳥居に向かって導かれるような構図的仕掛けがとられている。また、島の向こう側には白い絵の具が荒い筆触で塗り重ねられ、玄界灘の荒海を表現しようとしているかのようである。

さて、女人禁制であり、なおかつ上陸が簡単に許されないだけではなく、「お言わずの島」とも呼ばれるとおり、島で見聞きしたことを語ってはならないという厳格な決まりがあった沖ノ島が、絵画に描かれることはほとんどなかった。もちろん、古くは黒田綱政の《沖ノ島図》(十七世紀後半～十八世紀前半頃、福岡市博物館蔵)や、近年では麻田鷹司の《宗像社沖島》(昭和五十三年、福岡市美術館蔵)に描かれているように、海の向こうに見える孤島というイメージで、ある程度距離をとった遠望として島の全容を捉えるような形で描かれることはあるにしても、それらと本作が大きく異なるのは、本作が非常に近しい視点から沖ノ島を捉えようとした点である。これほど接近したアングルで沖ノ島を捉えた絵は、本作以外にはないと言える。

ともあれ、本作が制作されたのは、留学中に交友を重ねたフランス人画家であるモーリス・アスランの影響から、灰色のトーンによってものの形を表現する、重厚感あるモノクローム調の色彩という戦前の中村作品を特徴づける画風が定まった頃であり、さらには、のちの戦争画制作を予告するかのような、人物群像を巧みに描く大画面による「現代風俗画」を次々と描き、帝展の花形的存在として活躍をしていた時期でもある。《日本海沖ノ島》には、黒を多用した色調であることや躍動感のある筆のタッチという点において、この時期の中村研一の典型的特徴といえる画

風を看取することができる。しかしながら、本作には単なる風景画という側面を越えた特殊な成立事情があり、それを度外視することはできない。

水雷敷設艦『沖ノ島』を飾る彩管
中村研一畫伯の精進

【図2】「水雷敷設艦『沖ノ島』を飾る彩管　中村研一画伯の精進」『読売新聞』昭和11年7月18日

本作の制作については、昭和十一年七月十八日の『読売新聞』において次のように報じられている【図2】。

「波涛吼ゆる玄海の一孤島「沖ノ島」―日本海々戦でわが戦艦と敵艦が最初の砲火を交えて早くも勝敗の大勢を決した歴史的場所として有名なこの孤島の名を記念して海軍では水雷敷設艦「沖ノ島」を新造目下造船所で艤装中であるがこの精鋭の艦長室と士官室を飾る『沖ノ島風景画』が中村研一氏の手で完成した。沖ノ島は福岡からは廿五海里の海上にある文字通りの孤島で、住んでゐる人は島の頂上八百尺のところにある燈台守と沖津宮の神官の二人だけ、全山は茫漠たる原始林だ、十日毎に食糧品をつんで還つてくる燈台巡視船が唯一つの便りである、福岡出身といふわけでこの画を委嘱された中村画伯は食糧四日分を用意してスケッチのためこの島に渡つたが滞在が九日間にものびたためつひに貝類や海草類を漁つて腹を満したといふ苦心が纏められてゐる、出来上がつた画は茫洋たる玄海の海面と古寂びた沖津宮の鳥居を拝して荘厳の気が満ちてゐる十五号と十二号の二面である。」(2)

記事が報じる通り、本作は新造の水雷敷設艦「沖島」の艦長室と士官室に飾るための絵として帝国日本海軍から制作を委嘱された二点の絵のうちのひとつである。新聞記事中にその図版が紹介されているもうひとつのヴァリエーションとしての「沖ノ島」の絵は、本作以上に沖ノ島を至近距離から捉えたものであるが、同作は、「沖島」が昭和十七年に撃沈されたときに戦艦と運命をともにしたため、本作だけが残った。明治三十八年五月に、沖ノ島周辺海域で、東郷平八郎率いる日本艦隊とロシアのバルチック艦隊との間で、日本海海戦が行われたことはあまりにも有名であるが、東郷はこの海戦における大勝を宗像大社の神恩であるとした。そのような歴史を記念して、海軍は「沖島」と名づけた水雷敷設艦を新たに作ったのである。なお、昭和十二年には、沖ノ島に砲台が設置され、陸軍の防備施設が設置されるなど、戦争の拡大という時局を背景に、神体島・沖ノ島の軍事要塞としての意味はますます強まりつつあった(3)。このとき、海軍が中村に制作依頼をしたのは、彼が画壇において非常に影響力を持

「緑陰」とところどころ【四】
北・筑・前・沖・の・島
中村研一

【図3】中村研一「『緑陰ところどころ【四】　北筑前沖の島」『読売新聞』昭和11年7月18日

つ画家であったこと、さらには宗像出身であったことに加え、昭和四年に結婚した妻・富子の父親である中村正奇が海軍少将であったということも多かれ少なかれその背景にあったと思われる。

ともあれ、中村は、宗像大社との打ち合わせを経た後、食料四日分を用意して島に渡ったが、当初の滞在予定を大幅に越え、九日間の滞在に延びてしまったため、貝や海藻を取ってしのぎながら制作をしたという。二点の制作とはいえ、速筆で知られていた中村らしからぬ時間のかけ方であるが、このときの沖ノ島滞在について寄せた紀行文【図3】(4) に書かれているように、緑の深い原始林のなかを分け入り、野鳥のさえずりを聞き、そこに広がる風景の美しさを自分の中で咀嚼するために必要であった時間であったということも言えるだろう。さらには、宗像出身ということもあり、沖ノ島は幼いころより畏敬の念を抱くべき対象であったことは想像に難くないが、それに加え、戦争の拡大という時局を背景に、もはや時代の趨勢から無縁ではいられなくなっていた沖ノ島を描くことの重みも多分にあったにちがいない。

本作が評価されたからであろうか、その後中村研一は戦艦大和の士官室に飾る絵画を依頼され、本作とほぼ同サイズで《みほの関》(昭和十六年、呉市海事歴史科学館蔵) を描いた。また、従軍画家として藤田嗣治に並ぶ、数多くの戦争画を手がけたことは先に述べたとおりである。ただし、ここまで述べたような、戦時における特殊な成立事情をその背景に持ちながらも、《日本海沖ノ島》には、宗像出身の洋画家として郷土を愛し、畏敬の念を持って沖ノ島を描くことに真摯に向き合おうとした中村の思いが強く反映されているということは言うまでもない。

---

(1) 近代美術において宗像が風景画の題材となった例はそれほど多くはないが、たとえば湾曲する神湊の勝浦浜の海岸から大島をのぞむ坂本繁二郎の《神湊》(『日本風景版画　筑紫之部』大正七年) や、鐘崎にあった油屋旅館の二階から民家の藁屋根越しに大島と地島をのぞむ古賀春江《二階より》(大正十一年、第九回二科展、石橋美術館蔵) などが代表的作例として挙げられる。これらの作例を踏まえた「近代美術に描かれた宗像」についての考察は稿を改めたい。

(2)「水雷敷設艦『沖ノ島』を飾る彩管　中村研一画伯の精進」『読売

新聞』昭和十一年七月十八日。なお、本作制作についてより詳細な動向は、『神光』において「中村研一画伯の参拝　本郡南郷村出身の中村画伯は、目下艤装中の軍艦沖の島の将官室用の図面作製のため六月二十四日来社、打合せの上、二十五日縣廳の新風丸に便乗して沖の島に到着、爾来同島に滞在して会心の構図を練つて居られます」と報じられており、それを参照すると、同年六月末から沖ノ島に渡り、そこから九日間の滞在を経て、本作を完成させたとのことである。（『神光』第四十四号、昭和十一年七月一日）

（3）戦時下の沖ノ島については弓場紀知『古代祭祀とシルクロードの終着地　沖ノ島』新泉社、二〇〇五年を参照。

（4）中村研一「『緑陰ところどころ【四】　北筑前沖の島」『読売新聞』昭和十一年七月十八日、朝刊。全文は次のとおり。「北筑前の北方廿五浬の處に沖の島がある。まはり一里位の小島ではあるが、朝鮮からも日本からもの途上、航海の目あてである。東洋史のいろいろの英雄に、北筑から離れた日この小島をながめる時、海の向ふにまだ大陸があるといふ暗示を與へたのであらうと思ふ。それは朝鮮の方からも亦ゞであつたらうと思ふ。宗像神社三社の内沖ツ島をまつり奉る。それと燈篭がその八百尺の図上にそゝりたつ。人とてはこの二ヶ所にゐる五人にすぎない。深山絶壁と緑の深い原始森に包まれて居る、その木立の中はまるで天然の野鳥の動物園で月明に社前にたゝずんでゐるとまるで幼稚園の様な鳥々の聲のさわぎがきこえて来る。原始森のそれも孤島のためときびしい宮のおきての為おごそかに保存された森の美しさは行つた人でなくてはわからないであらう。腹が減れば岩間の濱ちさ（？）を採つて片貝の肉とであへものをする。おつけの実に私たちは小魚を釣つて来る、魚がつられたことがないのでたれにでもかゝつて来る。俊寛やロビンソンクルソの物語である。」